



Title	釜ヶ崎にみるバザールの知
Author(s)	宮本, 友介
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 50-57
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55662">https://hdl.handle.net/11094/55662</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

かま が さき  
釜ヶ崎にみるバザールの知<sup>ち</sup>

みやもと ゆうすけ  
宮本 友介

— KEYWORDS

かま が さき  
釜ヶ崎

バザールの知<sup>てきち</sup>

い ぼしよ  
居場所づくり

— AUTHOR

宮本 友介 | Yusuke Miyamoto

臨床部門 助教

専門は、心理統計学・認知心理学。「心理モデルおよび行動データ分析のための統計手法の開発」と「協調学習による情報教育」をテーマに研究してきた。現在は、これらの手法を実践の場でいかにして活かすことができるかに関心を持っている。

## はじめに

いわゆる専門知がいかに脆弱な基礎の上に建っているかという点については、この数年間で十分に示すことができたと言えるでしょう。では、われわれはどこに向かうべきなのでしょう。もはや、狭い専門領域のタコ壺に閉じ籠っているのは行先が見えなくなるのではないのでしょうか。私たちはこうした問いに対するヒントを求めて、かつて「日雇労働者の街」と呼ばれた釜ヶ崎のさまざまな活動をおこなっています。

月に一度開催している「哲学の会」では、「釜のおっちゃん」たちとの生き活きとした議論が交わされます。何か一つの答えに収束することはありませんが、そこではまるでバザールの喧騒のような知的興奮が惹き起こされています。学術的な専門知を「伽藍の知」と喩えるならば、釜ヶ崎にあるのはまさにその対極にある「バザールの知」です。また、そこから派生して、通称「ひと花プロジェクト」(a)という取り組みに関与するようになりました。これは行政からNPO団体が受託した高齢単身生活保護受給者を対象とした居場所づくり事業ですが、その中で表現プログラム「アジール呱呱々の声」(通称・アッコちゃんの会)を担当しています。現在、釜ヶ崎では急速に高齢化が進み、孤独と貧困(といった言葉では表し切れませんが)と隣り合わせの、いわば近い将来の日本社会の縮図となっています。その中で暮らす人たちからは、いろんな経験談が飛び出します。明るい話ばかりではありませんが、暗い話ばかりでもありません。私たちの取り組みが、釜ヶ崎の街と有機的に連携することで、おっちゃんたちの「もうひと花」へと繋がっていくという実感があります。

さらに「哲学の会」の中から、芸術に関心のある参加者が「釜ヶ崎楽描きの会」を結成し、精神的に創作活動をおこなっています。最初は絵画を中心としていましたが、コラージュや円空仏というように、特定の技法にとらわれることなく独創的かつ自由な発想で芸術作品を創作しています。これらの作品はラボカフェ(b)「釜展 in 中之島」で展示する機会をもち設けています。

本稿では、これらの取り組みについて、実践報告したいと思えます。



【写真】釜展 in 中之島

ひやといろうどう まち かまがさき ふくし まち かまがさき  
日雇労働の街「釜ヶ崎」から福祉の街「釜ヶ崎」へ

げんざい かまがさき よ ちいき おおさかしにしなりく ほくとうぶ はぎのちゃや さんのう  
現在「釜ヶ崎」と呼ばれている地域は、大阪市西成区の北東部、萩之茶屋・山王・  
たいしちく しゅうへん めんせき やく 0.62km<sup>2</sup>の区域にあたります。「釜ヶ崎」という呼称は、  
めいじ たいしやうき くかくせいり すで ちずじやう ちめい せんざい ぎやうせいてき  
明治・大正期の区画整理により、既に地図上の地名としては存在しません。行政的には、  
ほぼ同じ区域を指して「あいりん地区・地域」との呼称が用いられますが、「あいりん  
ちく」はいわゆる「だいちじかまがさきほうどう」を受けて1966年に大阪府・市・府警で構成さ  
れる協議会により命名されたものです。現在でもそこに暮らす人々は、名称変更によっ  
て何らかの問題が解決したかのように扱われることに対する批判と、ある種の愛着を込  
めて、自らが住む街を「釜ヶ崎」あるいは「釜」と略して呼ぶことが多く、本稿でもこ  
の呼称を用います。他にも、市外へ働きに出る労働者の間では「ニシナリ」や、古くか  
ら住む人たちの間では、かつて寄場があった「霞町」という呼称が使われたことがある  
そうです。

えとじだい かまがさき とびた ぼ ち へいせつ けいじやう のうち ひろ ちいき  
江戸時代の釜ヶ崎は、薦田墓地とそれに併設された刑場、あとは農地が広がる地域で  
した。労働市場としてのかまがさき げんけい 現在の にっぽんぼしじし な ごちやう  
釜ヶ崎の原型となったのは、現在の日本橋筋にあたる名護町と  
よ きちんやどがい  
呼ばれた木賃宿街です。

きちんやど しょくじ ていきやう はたご たい じすい きほん ひ たきぎだい  
木賃宿とは、食事が提供される旅籠に対して、自炊を基本とし日ごとの薪代  
(燃料費)としての「木賃」を支払うことで宿泊できる簡素な宿泊施設のことです。  
がんらい な ごちやう きしゅうかいどう そ しょくばがい さか えとじだい こうまき かくち  
元来の名護町は紀州街道沿いの宿場街として栄えていましたが、江戸時代後期には各地  
りゅうにゆう でかせ ろうどうしやなど じゅうやう おう きちんやど ていきやう  
から流入する出稼ぎ労働者等の需要に応じて木賃宿が提供されるようになり、それらは  
しだい いちじてき しょくばく しせつ ちやうきたいざい ぜんてい ひ やちん しはら  
次第に一時的に宿泊する施設というよりも、長期滞在を前提として日ぎめで家賃を支払  
う賃貸住宅・長屋の形態が一般的になっていきました。これが現在の簡易宿泊所、通称  
ちんたいじゅうたく な がや けいたい いっぱんてき げんざい かん いしゅうくはくじよ つうじやう  
「やど」を倒置して)ドヤの原型となります。

めいじき はい りゅうこう たいさく ちあん かいぜん しわく ぎやうせい な ごちやう  
明治期に入り、コレラ流行への対策と治安を改善する思惑から、行政による名護町の  
ふりやうじゅうたく てつきや いくど けいかく う よきよくせつ ねん めいじ ねん  
「不良住宅」の撤去が幾度か計画され、紆余曲折ありながらも、1891年(明治24年)  
ほうていきじゆん み かあく てつきや やく まんの ぼ じゅうみん た の だいきぼ  
には法定基準に満たない家屋の撤去・約1万に上る住民を立ち退かせるという大規模  
なスラム・クリアランスが実施されました。また、1898年(明治31年)には大阪市お  
よび堺市内での木賃宿の営業が禁止されたことにより、木賃宿は移転を余儀なくされ、  
さかいしな い きちんやど えいぎやう きんし きちんやど いてん よ ぎ  
とうじおおさかし りんせつ しがいしき にしなりくん いまみやしゅうへん あら きちんやど まち  
当時大阪市に隣接する市外地域であった西成郡・今宮周辺に新たな木賃宿・ドヤの街と  
しての「釜ヶ崎」が形成されたのです。こうした社会的「排除」が要因としてあったこ  
とは、今後の新しいまちづくりを考える際にも重要となります。

ご せんごふっこうき こうどけいざいせいちやうき こうわんうんゆぎやう けんせつぎやう ちゅうしん  
その後、戦後復興期および高度経済成長期には、港湾運輸業・建設業を中心とした

労働力需要が高まったこと、また1950年代からのエネルギー革命によって各地の炭鉱が閉山したことにより、釜ヶ崎には仕事を求めて全国から労働者が集まってきました。1960年代後半には、釜ヶ崎は万国博覧会（大阪万博）に向けた労働力を供給する機能を果たし、産業の移り変わりとともに主な業種は変遷しつつも、流動的労働力の需給バランスをとるための仕組みとしての日雇労働市場＝「寄場」が確立されてきました（ちなみに、通常「寄場」は「よせば」と呼ばれますが、これは雇用者側の視点であり労働者側としては「よれば」と呼ぶべきだ、という意見があります。このため、どちらでも読めるように送りがなを省略した表記を用いることにします）。また、ドヤは流入する多くの労働者を受け入れるために狭隘化し、それもフロアをさらに上下に区切ったものが主流となった一方で、住居対策（あるいは不就学児童対策）として家族世帯には周辺地域の公営住宅への入居を推進したことにより、釜ヶ崎は単身日雇労働者が密集する地域となりました。

1990年代のバブル経済の崩壊以降、釜ヶ崎の寄場としての機能は急激に低下します。背景としては、求人約9割を占めていた建設業の事業規模縮小とともに、建設工法の高度化・機械化による熟練技術者の需要減少、派遣労働など求人雇用形態の多様な変化があります。こうした景気後退による失業率の悪化は全国的な問題でしたが、流動的な雇用形態である寄場ではその影響が顕著です。

釜ヶ崎の寄場における「ゲンキン」（現金払いで日々雇用する形態）での年間求人数は、かつては延べ200万件にも上る勢いでしたが、2001年度にはその1/3にまで下落、サブプライム住宅ローン危機が表面化した2007年度以降はさらに低迷し、2013年度では30万件程度にまで落ち込んでいます。また、日雇労働被保険者数で見ると、1986年の24,458人をピークに、現在ではその1/10以下にまで減少しており、そのうち55歳以上の占める割合も過半数となっています。負傷・疾病で仕事を休んだことをきっかけに、そのまま仕事に就けずに路上生活を余儀なくされるケースも多くあります。

わが国には、「セーフティネット」としての生活保護制度があります。しかし、2003年に「ホームレス自立支援法」に対する国の基本方針として「ホームレス（状態にある人）に対する生活保護の適用に当たっては、居住地がないことや稼働能力があることのみをもって保護の要件に欠けるものでない」という考え方が示されるまで、生活保護の申請には特定の住所が必要とされてきました。また、自らの労働への意欲・仕事へのプライドから、生活保護制度の申請に抵抗を感じている人もいます。生活保護の不正受給については近年問題視されていますが、本当に保護を必要とする人に制度が行き届かないという問題については軽視されてきたのではないのでしょうか。

「自立支援法」の施行と労働者の高齢化を契機として、固定した住居をもたなかった日雇労働者たちにも生活保護制度の適用が進み、一般的な賃貸住宅で定住する人が増加しました。かつてのドヤは、改築とともに生活保護受給者のみを入居対象として申請

てつづ そうだん ひ う ふくしじゅうたく すがた か おな ねんだい  
 手続きの相談なども引き受ける「福祉住宅」へと姿を変えています（同じく2000年代  
 ぜんはん とられた インバウンド 観光を促進する政策から、外国人観光客向けのゲストハ  
 ウスとして生まれ変わったドヤもあります）。釜ヶ崎では、「福祉の人」といえば介護  
 ヘルパーやケースワーカー などを指すことがありますが、「福祉」という言葉はだいた  
 い「生活保護」の意味で使われています。生活保護の現状については、全国の保護率  
 すいけいじんこう たい ひ ほ ご じつじんいん わりあい やく たい おおさかしぜんたい  
 （推計人口に対する被保護実人員の割合）が約1.7%であるのに対して大阪市全体では  
 やく 5.6% たか すいじゅん にありますが、その要因の一つとして釜ヶ崎を含む西成区での保護  
 りつ が挙げられています。大阪市の生活保護統計によると、西成区の保護率は約23.8%で  
 あり、約4人に1人が被保護者であるという、市内でも飛び抜けて高い水準になってい  
 ます。また、同じく生活保護世帯数は25,586世帯、被生活保護人員は28,166人、生活  
 保護受給世帯あたり平均人員は1.1であり、ここでも単身世帯の割合が高いことがうか  
 がえます（いずれも2014年9月時点の統計に基づく）。現在の釜ヶ崎は、かつての労働  
 しじょう まち ふくし まち へんよう  
 市場の街から福祉の街へと変容しつつあります。

かだい ふ かんよきほん けいせい  
 課題：不関与規範とコミュニティの形成

じょうじゅつ かまがさき く ひとひと なか たんしん こうれい せいかつ ほ ご じゅきゅうしゃ し  
 上述のように、釜ヶ崎に暮らす人々の中では単身・高齢の生活保護受給者が占める  
 わりあい たか なるほど ひやといろどうしや ぜんこくかくち りゅうにゅう けいせい ち  
 割合が高くなっています。また、日雇労働者として全国各地から流入した経緯から、地  
 いき じゅうぶん にんげんかんけい きばん も ちいさき かつどう さんか まかい すく  
 域に十分な人間関係の基盤を持たず、地域のコミュニティ活動に参加する機会も少なく  
 なっています。これも裏を返せば、しがらみも少ないため「誰の故郷でもないから、み  
 んなの故郷になれる」という側面もあるのかもしれませんが。

寄場にはいわゆる「不関与規範」、すなわち、互いの過去や個人的な事情に過度に踏  
 こ み込まないという独特の関係規範があるといわれます。かつての日雇労働者が生活保護  
 じゅきゅう しごと げんば さかば りゅうどうてき こうゆう ば ていじゅうせいかつ  
 を受給するようになり、仕事の現場や酒場といった流動的な交遊の場から定住生活へと  
 いこう りんじん こていてき にんげんかんけい かか おそ  
 移行したことによって、隣人との固定的な人間関係でトラブルを抱えることを恐れるよ  
 うになり、かえって社会的に孤立するリスクを高めているという矛盾もはらんでいます。  
 こうした釜ヶ崎に独特の関係規範の中で、過度に自己開示を要求することなく関係性を  
 ふか けいせい ようい おも  
 深めていくコミュニティの形成は容易ではないように思われました。

しかし、実際に釜ヶ崎に身を置いてみると、いわゆる「不関与規範」にあたるものに  
 で あ 出会うこともあります。それだけではないということも強く感じます。釜ヶ崎にも  
 たにん かか きょうゆう し ほ よっきゅう  
 「他人と関わりたい・共有したい」あるいは「知りたい・知って欲しい」という欲求は  
 たし そんざい てきせつ ひょうげん ば むす はつげん  
 確かに存在し、それを適切な「表現の場」と結びつけることができれば発現される、と

いうことです。

じっせん ひょうげん ば  
実践：表現の場をつくるということ

「哲学の会」と「アジュール呱呱の声」は、いずれも月に1回の頻度で開催される哲学カフェのようなものです。どちらの会でも、基本的なルールとして以下のことが提示されます：①自己紹介は不要、②発言は義務ではない、③語るときは自分の経験（言葉）で、④他者の発言は遮断せずに最後まで聞くこと。もちろん、この通りにいかないこともあります。この単純なルールは「不関与規範」を根底とした関係性の中でも、過度に自己開示を強要せず、また単なる論争に終始しないことにおいて重大な役割を果たしています。また、単身高齢者の居場所としての需要と、権威的な知（伽藍の知）を前面に持ち出さなくてもよいといった点がうまく結びついているように思います。

参加者には、回を重ねるごとに「常連」と呼べるような人が増えてきましたが、それ以外にも時折ふらっと立ち寄って参加してくれる人もいます。常連メンバーの間には従来の釜ヶ崎的な「不関与規範」とは異なる形で、新たな連帯が生まれているように感じられます。とりわけ過去の話聞き出そうとしなくとも、自然な形で参加者自らの豊かな人生経験談が語られることがあります。無論、明るい話ばかりではありませんが、いままで釜ヶ崎では語られることのなかったそれぞれの「過去」が共有される瞬間があります。

「哲学の会」は、2012年4月より主に釜ヶ崎のほぼ中心にある西成市民館で実施しています。毎回一つのテーマについて、2時間程度、脱線しながら語り合います。各回のテーマは前の回の終了時に参加者の提案で決定します。たとえば、第1回目のテーマは「幸せについて」でした。また、「賭け」というテーマの中で、かつての痛い経験談を話してくれた方もいます。こうした自らの身近な経験の中から、個性豊かな面々が紡ぎ出す言葉には、まさに「バザールの知」があふれています。また、「哲学の会」から派生して始まった「釜ヶ崎楽描きの会」では、アートに関心のある人々が集い、独創的な創作活動に励んでいます。

「アジュール呱呱の声」（通称：アッコちゃんの会）は、2013年7月より西成区からの委託事業である「単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」（通称：ひとはなプロジェクト）の中で、表現プログラムの一環として実施しています。単身高齢生活保護受給者が主な参加者ですが、とくにテーマとして設定したわけではないにもかかわらず、生活保護を受給するに至った経緯や、その際の逡巡、これからの希望や不安に

ついて、赤裸々に語られる場面が何度かありました。また、働くことへの意欲や社会の役に立ちたいという思い、過去の仕事に対する誇り、若い世代への励ましなど、参加者の中には、単にステロタイプな「お互いに触れてはならない」暗い過去だけではなく、共有したいものがあるのだということを感じさせられました。

釜ヶ崎には、薬物依存やギャンブル依存に陥った経験をもつ人も多くいます。2014年度におこなった「釜ヶ崎依存学研究会」の活動では、「依存」のネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面にも目を向けようという趣旨で研究会を開催しました。その中で「私の依存に感謝する」というテーマで話し合いました。もちろん、自身の経験を「ポジティブに捉えることはできない」という意見もあり、テーマに関しては成功だったとは言えないかもしれません。しかし、経験を見つめ直すこと・共有することの可能性を再認識するには、よい機会となりました。



〔写真〕釜ヶ崎依存学研究会

## おわりに

ここまでで報告した活動は、どれも当初は明確な目的意識や義務があっ**て**はじまったものではありませんでした。まずその場に身を置くことからはじめて、応答できることがあれば手を上げる、といった感じでしょうか。日雇労働を自嘲的に称して「アンコ」と呼ぶ釜ヶ崎用語があります。海底でじっと待っていて、えさとなる魚がやってきたら補食するというアンコウの姿が、日雇労働に重なるといわれますが、私たちの活動にもそのようなところがあります。すべてがうまくいっているわけではありませんが、このように構成的になりすぎない、メリットを追い求めないことが、実は大切だということを感じています。

現在、世界各地で「アートによるまちづくり」がおこなわれています。釜ヶ崎もその例外ではありません。街の再開発にアートを取り込むことが、いわゆるジェントリフィケーション——街全体の生活水準の向上や犯罪率の低下に繋がるといわれていますが、その一方で、たとえば地価の上昇により低所得者層が居住できなくなるなどの新たな社会的排除を生み出すという意図しない方向に進んでしまう可能性<sup>あ</sup>があります。車で喻えるならば、ハンドルやペダルに「遊び」がなければうまく操縦できないように、過度に目的に縛られることで本来目指していたところに辿り着けなくなるということが起こります。いかにしてアンコウのような活動を継続していくかが、今後の一番の課題となっています。

## 既刊資料

一宮本 友介・西川 勝 (2015) 「釜ヶ崎プロジェクト『パズル的知の創発』実践報告」『Communication-Design』12 : 1-10.

## リンク先

\*a) ひと花プロジェクト : <http://www.hitohanap.org>

\*b) ラボカフェ : <http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/ver2/join/labcafe.php>